

れども、舊寺院を捨て、は、自己の生活に危難の臻るが恐しとて、表面有り難きうに、装うて自ら欺き、人を欺くが如きは、甚だ以て怪しからぬ次第なり。新しき教育を受けし青年僧侶の中には、この種の奴輩、甚だ尠からず、眞に唾棄すべきなり。

若しそれ信仰なくして讀經し、説教するも、これを以て、一の飯食ふための手段であるとして悟つての上のことならば、それも一寸妙なるべし。法を賣り、佛を賣つて生活するは、寶物を賣つて、借金の始末をつけるのと、五十歩百歩のところなればなり。

要はたゞ眞實なれ、赤裸々たれ、嘘をつくな、胡麻化すな、有り難くもないのに、有り難さうな風をするなどといふに在るなり、筆先や口先では、如何に殊勝を装うとも、己が心は疚しかるべく、佛の心が承知し給はざるべし。「獨行不慚影、獨寢不愧衣」これではなくては眞に青年教育家とは言へざるなり。勿論、人間とも言へざるなり。

得度も可、還俗も可、寺に入るも可、寺を出づるも可、たゞ汝の信仰によつて動け、而して偽善は信仰の賊なるをおもへ。

▲眞佛教

我等は、罪深きものなりといひ、現世は、厭ふべきものなりといふ、誠に奇怪千萬の申條なり。

縱令、我等に罪といふものありとせむも、それは我等の心鏡、時に塵埃を惹けるもの、常に拂拭を怠らざるは、我等の務ならずや。縱令、現世甚だ厭ふべしとせむも、それは社會の組織、尙未だ完全ならざるがためのみ、これが改善を計るは、我等の任ならずや。

これをこれ思はずして、神や佛を、我以外に求め、天國や極樂を、現世以外に造らむとするが如きは、眞に是れ、人の禪で相撲を取らむとする猶者にあらずむば、竹棹を振つて、星を叩き落さむとする痴漢ならずむばあらず。

人間の事、人間の世の事は、百千萬事悉く人間が、人間の世に於て處理すべき

ものなり。「我」を發達せしめよ、「佛」そこにあり。「社會」を進歩せしめよ、「極樂」そこにあり。

今の佛者、何ぞといへば、必ず死人を擔ぎ出す、誠に奇怪千萬の振舞なり。

宗教は、死なむがために必要なるにあらずして、生きむがために必要なり。死人のために必要なるにあらずして、生者のために必要なり。死後に必要なるにあらずして、生前に必要なり。

試みに、今の佛敎より、葬式を引き去り、法事を引き去らむか、剩すところ、何も何物ぞや。彼等の謂はゆる説敎といふもの、畢竟これ、行く先きの短き爺婆が死支度の説明にあらずや。

人に死支度を教へてこれを殺し、その死骸の始末までして尙飽足らず、更に年回法事と稱して、骨に向つて讀經して錢を貰ふ、至れるかな、盡せるかな。

若しそれ、活ける社會に手を垂れて、活ける人間を教導し、人類を發達せしめ社會を進歩せしめ、以て宇宙の目的を翼賛すといふが如きは、今の佛者の與り

知らざるところ。而して、佛敎の面目こゝに在り、宗教の極致こゝに在り。

八、神經の痲痺せる現代

(一)臭いもの身知らず

「アツ、臭い！。あかちやんが、鹿相でもしたンぢやないか。」「イ、エ、あのウ、おわい屋さんが参りましたので……。」『道理で、随分ひどく匂ふ。沉香を持って來て呉れ、……無ければ、蜜柑の皮でもよい。』自分の體から出たものだなどいふことは、まるで打ち忘れての大騒ぎ、これがマア、人間の常情といふもの。ところが、同じ人間のおわい屋さんは平氣で、この臭いものを取扱つて居る。未だ曾て、沉香を焚きながら、これを

汲み取って居るおわい屋さんを見たこともなければ、未だ曾て蜜柑の皮を燻べながら、肥車を挽いて歩くおわい屋さんにお目にかゝったこともない。然らば、おわい屋さんなるものは、一體人間の常情を御所持がないのであらうか。

夏の蒸し暑い日に、魚河岸を通った人は、誰でも、その一種の臭氣に鼻を打たれて、ムーンとするであらう。ところが、如何に商賣とは言ひながら、一心太助の親類縁者の魚屋諸君は、その中で、元氣に愉快に立働いて居るではないか。この、おわい屋さんにしても、魚屋さんにしても、吾々の臭いとして、閉口もし、閉鼻もするところのものに對して、平然として居るといふのは、抑々何のためであるか。昔の人の言った言葉にも、

與善人居如入芝蘭之室久而不聞其香即與之化矣與不善人居如入鮑魚之肆久而不聞其臭亦與之化矣是以君子謹其所與處とあるやうに、つまり、その境遇に化せられたものと解せざるを得ないのである。境遇に化せられるといふのは、外部の刺戟に馴れてしまつて善事を爲すにも悪事を爲すにも苦痛を感じないやうになるといふことである。

(二) 刺戟に馴れる

例へば、煙草を吸ふといふことなどでも(無論悪事である)……最初は、その刺戟の強いのに随分苦しむのである、しかし、日を経るに随つて、その刺戟に馴れてしまつて、終には、ますます強い刺戟を要求するやうになる。然るに、その反對に、煙草を吸ふことをやめる……(勿論善事であ

る)……といふには、非常に強い努力を要する、努力に伴ふ、苦痛に堪へなければならぬ。しかし、それも、漸次苦痛が減少して、終には、煙草の匂が嫌になるやうになるものである。又、外の例で言ふと、モルヒネは、或る分量を、一時に注射すれば、人をして死に致らしむるものである。ところが極めて少量のモルヒネを、幾回かに分けて注射し、漸次その量を増すやうにすると、随分多量のモルヒネを、一時に注射しても、聊かも危険がないといふことである。

これ等の例によつて考へて見るに、境遇に化せられるといふこと、：即ち刺戟に馴れるといふことは、善い方から言へば非常に善く、悪い方から言へば非常に悪い。従つて吾々は、常に善い刺戟を澤山に受け

て、悪い刺戟は成るべく受けたくないやうにしなくてはならない。

(三) 強烈な刺戟

然るに、現代社會の狀態は、どの階級を眺めても、大概、神經痲痺に陥つて居て、餘程の強刺戟を以て向つても、左程の反應がないといふ有様。マア、試みに淺草公園へ往つて、軒を並べた活動寫眞館の繪看板を見よその如何に強度の刺戟力を持つた繪の具を使つて、如何に刺戟力の強い繪が描いてあるか。僕等のやうな氣の小さいものは、一度あの前を通ると、頭がグラ／＼して、その日は一日、食事が進まない位だが、しかし現代は、確にあの位の強烈なる刺戟を以てさアどうだと、押へつけなくつては、何等の反應もない程に、その神經が痲痺して居るのである。

一時、ジゴマが歓迎されたといふのも、ジゴマといふ兇賊の所業が、如何にも、人間離れのした、強烈な刺戟力を持つて居るからである。嘗ては、忠臣藏で、非常に刺戟されて居た社會も、今はもう、ジゴマ以上のものを持つて來なくては、何の感じもしないといふ程になつてしまつた。「新しい女」といふのは、随分刺戟の強い言葉である。又、この新しい女諸君の行動云爲も、頗る刺戟の強いものである。殊に、人間の本能に關する自由開放の態度などは、チト、強さが過ぎるやうに感ぜられもする、しかし、かゝる強過ぎる程の刺戟を受けながら、これを左程にも感じないといふ程、神經の痲痺した現代にも、眞に以て呆れざるを得ないではないか。

(四)出版界の墮落

之を出版界に見るに、……元來、出版といふ事業は、國の文明に貢獻するとか、國家教育の補助機關だとか言つて、大層な任務を帯びて居るやうに言つて居るのであるが、その出版界昨今の状態は、果して能く、その任務を全うすべく、歩を進めて居るかどうか、或は『性慾論講話』だとか、或は『性慾哲學』だとか、さては『戀になやめる女の手紙』戀に惱める男の自白『若き女の日記』四十女の思ひ切つた告白『情慾左右論』、『生殖器の研究と其何々』、甚だしきに至つては『遊女和田芳子が苦界四年の實験告白遊女物語』といふのさへ出版されて居る。かういふ風に、刺戟の強ひ名の本を出版して、人間の弱點に乘じ、人間の獸性を煽動して、しか

も國の文明に貢献すると言ひ、國家教育の補助機關だといふ、チャンチャラをかしいとは、實に、此くの如きをいふのであらう。こんなになんてして、金を儲けて、一體どうするつもりか、新橋とか柳橋とかいふ橋の下で、恐いをばさんにふん捕まッて、盛に獸性を發揮したとどのつまり、目出度絞り取れるが如きことなくば、誠に以て幸である。否、こんなにまでして金を儲けなければならぬといふのか、それとも又、こんなにまでしなれば、本が賣れないといふのか、若し、この位強烈な刺戟を以て向はなければ、本が賣れないといふのならば、本屋が悪いのではない、社會が悪いのである。現代人の神経が、痲痺して居るのである。

(五)一押二押三押四金

強烈なる刺戟といふのは、或る場合には、押しが強いといふことだと解し得べきこともある。古來、一押二金三男と言つて、何事か成功しやうといふには、この三拍子が揃はなくては駄目だとしてあつたが、今は、一押二押三押四金で、金を作るにもまづ第一押しが強くなってならないのである。何か賣りに往くとする、『今日は、…結構なお天氣さまで、…これは今度、新案特許のガラス拭きでございませうが、御試験を願はれますまいか』『うちぢや、さういふものは、いりませぬ』『さやうでございませうか、左様なら。』これではとても、商賣にはならない。又、小口貯金の勧誘に歩くにしても、『どうも酷しい寒さでございませうナア、…、エ、どうでしやう、大將、お子供衆のお楽しみに、一口這入つて下すッては

……』「イヤもう商賣が閑で、かいても駄目だ。……貯金どころか、その日その日が越しかねて居るんだ。』「成程、その日くが越しかねて居ては貯金は六ヶしいてしやう。左様ならこれではまるで誘勸になつて居ない。もし押しを強くして、第二矢を放ちそれでも手ごたへのない時は、第三矢を放つといふやうに、飽く迄先方に強い刺戟を與へて、品物なら買ふまでは動かない、貯金なら加入するまでは歸らないといふ程の押しを持つて居れば、大抵の仕事が成就しないといふことはな

（六）**巧妙なる商賣**

實例を挙げると、或時、『これは味の素の見本でございますどうか召

し上つて下さい。』と言つて、小さな瓶を置いて行つたのがあつた、見本を呉れたのだらうが、それにしても、随分勉強したものだわいと、大に感心して、これを使つてしまつた。ところが、四五日経つと、『先日差上げて置きました味の素は、もうお使ひ下さいましたか。』と云つて來た。『ハア、どうも有り難たらう、すつかり使つてしまひました。』エ、それではどうか、二十五錢だけ頂きたうございます。』何のことだ、貰つたと思つたからこそ使つたのであつて、錢を取られる位なら、そのまゝにして置くのである。感心してお禮を言つたりした上で、代金を取られては、誠に以て、世話のない話である。

又或る時、富山の薬屋のやうに、大きな紙袋の中へ薬の這入つたのを

持つて来て、『これを預つて置いて下さい、召し上つたら、後で代を頂きますから。』といふ、一寸見ると「仁丹」と書いてある、「ハハア、仁丹も、富山の真似をするやうになつたのか。』と、心竊に感心した、更らに能く見ると、仁と丹との間に、細く一の字が引いてある。變だと思つて、振假名を見ると、ジンイチタンと書いてある。『ホイ、又一杯食はされたか。』と、をかしくもあれば、腹立たしくもあつた。

その外孤兒院の行商隊や廢兵の藥屋さんなどの強刺戟には、随分降参させられるのである。おかげで、僕のところには、清心丹だとか、シャボンだとかいふものが、賣りたい程ある。しかし、苟も、セチ辛い今の世、神経の痲痺した現代に立つて、兎も角も、生きて往かうといふには、少く

とも、この位押しが強くなくては、駄目であらう。又、賣られる方でも買ふまいと思つたら、第二矢が射込まれやうが、第三矢が放たれやうが、平然として、一向これを受けつけないで、美事にこれを撃退する程の忍耐力抵抗力がなくては、今の時のやうに押賣りの多い時代に處して、無駄錢を使はずに、生きて往くことは困難である。

(七)刺戟と刺戟の競争

一言にしてこれを言へば、現代は、神経痲痺の状態に陥つて居るのである。従つて、現代に處して往くには、非常に強烈な刺戟を以て、向はなければならぬ。即ち現代は、刺戟と刺戟との競争場で、押しと押しとの競争である。酒を好んでアルコール中毒に罹つたものは、酔つて居

なければ、仕事が出来ないし、煙草を嗜んで、ニコチン中毒に罹つたものは、片時も煙草を放すことが出来ないといふ。共にこれ、強烈なる刺戟なくしては、生存することの出来ないといふ程、神経の痲痺した病人である。これを思うて、更に、あらゆる階級が強烈なる刺戟を要求して居るかに見られる現代に對して、僕は、甚だしく悲觀せざるを得ない。……オット、悲觀は、ニコト主義の大禁物である。願はくは、相共に警めて、悲觀の現状を、樂觀化させやうては、あるまいか。(大正二年四月の「ニコト」)

▲夫婦風呂と國家の滅亡

羅馬の滅びたのにも、印度の亡びたのにも、勿論、種々の原因はあるが、國民奢

修の風を増長し、淫靡の俗を馴致し、滔々としてその底止するところを知らざるに至つたといふことも、その一ツに數へて差支はあるまい。而して、淫風盛なる時、必ず浴場の醜化を見る。羅馬の盛時は言ふまでもない、その遺跡中のカラカラの浴場は、今も旅客をして、當時の華奢と淫靡とを想はしむといふてはなにか。印度莫臥兒帝國の盛時、たま、天井に、悉く春畫を描いた浴場があつて、今もそのまゝ遺つて居るそうだが、英政府が、あんまりひどいといふので、その天井を塗抹したといふことである。

我國に於ける、徳川時代の湯女は、姑く問はずとするも、頃者、我が東京向島の地に、夫婦風呂といふものが出来たといふことである。その目的、果して那邊にあるかは、僕の如き不粹の徒の窺知るところではないが、傳へ聞くところによると、これ一男一女を携へて、浴みせむと欲するものゝために、備へられたものだといふことである。かゝる種類の計畫が、現代人の御機嫌に叶つて、其處にも此處にも、夫婦風呂が現出すること、恰も活動寫眞館の現出したるが如きもの

夫婦風呂と國家の滅亡

とならむか、それでも、尙、日本の將來は、果して樂觀して居て差支がないであらうか。

一方には、自分の哲學的見地からして、性交の自由解放を欲求する青年男女が殖えて来て(青踏社式の青年男女)居るのに、更に他の一方では、かゝる性慾満足のための設備が整つて来ては、もう至れり盡せりて、これ以上の腐敗もこれ以上の墮落もあるまい。

九、苛税と脱税

如何にかして、苛税を課せんとする國家あれば、如何にかして、脱税を謀らむとする國民が出て来る。東京市で、畜犬税を増さうとすれば、市民は、直に、犬の戸籍を、群部へ移さうとする。自分の収入を正直に、書き

出して居る月給取が、幾人あるか、偽りなく、自分の賣上げ高を、書き上げて居る商店が、何軒あるか。上は三井三菱の大商人より、下は横町の豆腐屋に至るまで、大抵は、その所得を偽つて、納税の輕からむことを、冀はないものはないとのことである。

元來、納税は、國民の義務である。國民にして、苟にもこの義務を誤麻化さむとするものあらむか、それは實に、非國民といふべきではないか。徵兵忌避と等しく、直にこれを處罰すべきではあるまいか。勿論、收税吏の方に、ぬかりのあらう筈はない、小さな店頭へ、二人も三人も出て、なつて、それ判取帳を出せ、それ賣上帳を見せる、元帳はどこにある、日記帳はどうしたと、それは、随分厳しいお調べをなさるので、から、そ

の眼を偷んで、聊かでも、納税の義務を軽減しやうといふには、なかなか、
以て、一通りの苦勞心配ではないといふ。

それもよい、しかし、この收税吏君は、三井や岩崎のやうな富豪とか華族とかいふものに對しては、矢張り、この様に、嚴重な調査をして居られるかといふに、必ずしも、そうでないといふ證據が、澤山ある。

一例を擧げるならば、彼等富豪や華族の庭園である。僕等は、この廣い東京市内に、犬小屋一軒建てる程の地面さへ、所有することが出来な
いと言つて居るのに、彼等富豪や華族は、この土一升金一升の東京市内に、老樹蒼鬱、晝尙暗い程の、大庭園を有し、泉水あり、芝生あり、花壇あり、温室あり、テニスのコートもあれば、鞦韆もあり、木馬もあるといふ。而し

て彼等富豪華族は、これを宅地として届け出てゝは、税金の多額となるを恐れ、多くはこれを、山林として届け出てゝ居るといふことである。これ豈、見逃すべからざる大脱税であつて、收税吏諸君の、最も追求すべき税源ではないか。古杉矗々、老松亭々たるところ、一見これを山林といふ、些の不可なきが如きも、人口日に増加して、自ら住むべき家を建てる地面さへ得難しとして、苦しみつゝある人多き今の世に、山林の如き大庭園を有するは、贅澤の上の贅澤である。かゝるものからこそ、苛酷な税を徴收しても、誰かこれに異議を挿むものがあらうや。試みに思へ、池のほとりには石燈籠あり、池の中には、緋鯉や真鯉が潑漈として躍つて居る、こつちの方には亭があるし、あつちの方には温室がある、凡そ

世に、此くの如き奇怪なる山林が、どこにあらうや。

嘗に税金のことばかりでない、一錢二錢の小博奕で、チヨイと一夜の無聊を慰めやうとした程の小罪は、どしどし検舉せられるが、高位大官が、財布の底を叩いての大賭博は、却つて門前に警官の護衛が附くといふやうに、吞舟の魚は、いつでも見のがされて居るのである。課税しやうとならば、納税に堪へ得る階級に、税源を見出すに力めなければならぬのを、却つて常に、まづ課税に堪へ得ないものに向つて、課税しやうとする、ここに於て、縱令それが、正當な課税であるとしても、結果は遂に苛税となるのである。

苛税誅求、人民の膏血を絞つて、而して何事を爲さうといふのである。

か。國家の存亡、皇國の興廢、實にこの秋にあるとでも言ふのならば、吾等國民は、日清戦争の時の如く、日露戦争の時の如く、随分過重の負擔をも辭しないのである。然るを、戦争も過ぎ、國運も發展して、大に民力の休養せられざるべからざる今の時、尙且つ戦時税をそのまゝ負擔せしめられつゝあるさへ、甚だ堪へ難いところであるのに、この上、不用の二個師團増設の如きを實行して、更に國民の負擔を重からしめやうといふのなら、それこそ、舉國一致して、これに反對しやうではあるまいか。

課税と言へば、僕等の理解に苦しむことが、何程もある。その一つは、即ち貴衆兩院議員、及び東京市會議員等の、通行税免除である。國家が、兩院議員を優待するといふ趣意で、汽車のフリーパスを贈るのは、マ

ア聞えて居るとしても、これに伴ふ通行税までをも、免除するといふのは、何等の理由に基いたものであらうか。東京市會議員の如き、電車のフリーパスを貰つて、乗り廻るは、議する程の價かないとしても、これに伴ふ通行税までをも、納めないで居るといふのは、理窟の立たないことではないか。些少なことではあるが、一方には納税の實力ある此等の人々に對して、かゝる寛大な取扱もして置きながら、他方に於て、納税か死かといふ程、悲惨な境遇に居る人民に、重税を課して、平然たるなど、随分、無慈悲でもあり、且つ徹底しない處置ではないか。

増税の不可なること、今更言ふまでもない。吾等國民は、何とかして、聊かでも、課税の軽減せられむことを、熱望して止まないものである。

それにまづ、西園寺内閣の企てたる、制度整理を實行して、府縣を廢合するもよし、冗員を淘汰するもよい。

例へば、京都府と滋賀縣の如きは、必ずしも二つに分けて置く必要はない。あの小さい面積で、あの生産力の多くない土地に、二個の地方廳を存し、二人の知事を置き、事務官以下の役人、すべて二重にして置く必要はどこにある。一府若くは一縣として、役人の數を、現在の三分の二位にしても、優に事務は舉るであらう。又、内務省中の神社局と宗教局との如き、これを二局として併置すべき程の事務は、斷じてない。否寧ろ、神社宗教の二局を廢して、これを地方局中の一課とするも、尙且つ足る程のものである。

又、文部省の如きも、果して過去の如く、無能なるものならしめば、必ずしも一省として、これを存置するの要がどこにあらうや。内務省中の一局として、敏腕なる局長を置くの寧ろ好成績を擧げることが出来るかも知れない。

全體、日本のお役所は、人間が多過ぎる。従つて、どこのお役所へ往つて見ても、たゞ少しばかりの仕事……僕等がやらうものなら即時に始末をつけてしまへる様な仕事を、あつちへひねくり、こつちへひねくり、二日も三日も結末をつけないで、平氣で居る人が多い。八時出勤四時退出といふさまりの役所へ、十時も過ぎ、十一時近くなつてからのつそり出かけて、二時半頃から、時計ばかりを眺めて居るといふやうなお役

人もあるし、中には、隔日出勤といふやうな、呑氣千萬なお役人もある。その癖少し腕のありそうな人間になると、大抵、内職の一ツや二ツは持つて居る。かういふ人達が、吾等の納める税金の中から、月給を貰つて居るのかと思ふと、吾等納税者たるもの、誠に氣が氣て無い。

五十圓取りのお役人を二人置いて、遅出早退、事務澁滞といふよりは、寧ろ、これを一人として、七十五圓給與し、早出遅退、事務敏活といふことにした方が善いではないか。人間が多過ぎるから、お互にもたれ合ひとなり、責任のなすり合ひとなつて、それでは仕事は捗取らないのである。人間の頭數を減じて、手當を善くし、責任を自覺せしめたならば、働くものも働き榮えがあるし、働かれるものも、事務が擧つて都合がよい。

冗員淘汰といふことは減税の目的から言っても、事務進捗の點から考へても極めて有効なことである。

西園寺内閣が、どれほどの壽命があつたら、果して、制度整理や税制整理を實行し得たであらうか、又その整理の程度が、果して、僕等の希望に副ふかどうかも疑問であるが、兎も角も、國民の痛苦が、那邊にあるかを看取して、聊かでも、これを緩和しやうと企てたその志は、確に嘉賞するに足ることである。然るに、陸軍が、頑強に反抗したために、遂に總辭職をすることとなつたのは、眞に惜しいことである。

後繼内閣が、誰であつても、差支ない。一方に於ては、この制度整理と税制整理とを繼承して、國民の負擔を軽減し、他方に於ては、米價の調節

を行つて、國民の生活を容易ならしめ、飽くまで、民力の休養を謀つて貰ひたい。軍備如何に擴張せられたりとして、國民悉く饑餓に苦んで居ては、これを如何ともすることが出来ないではないか、大正元年一月の『新公論』

▲畜犬税と蓄妾税

税金が高い、ア、税金高い。年に二度だからこそ、平常は、米の高い程には感じもせざれ、納税期になると、無敵に癢に觸る程、その高さが身にも財布にも、ひし／＼とこたへる。現に、この下半期の税金は、上半期の税金の、五割以上も増して居る。この分で増された日には、僕等のやうな、小賣商人は、利益の全部を、税金に徴收されて仕舞ふことになるのも、あまり遠いことでもあるまい。そこへ持つて来て、今度は、畜犬税を十倍にして、これまで一圓のものを、十圓

にしやうといふ計。晝だそうだ。随分人を馬鹿に……犬を馬鹿した話ではないか。一圓の税金でさへ、附加税を加へると、一年に三圓五十銭からになる、それを十圓にすれば、附加税共、三十餘圓にもならうといふもの、華族や富豪のお座敷に、僕等人間様さへ、未だ据つたことのないやうな、美しい蒲團の上へ据つて、僕等人間様さへ、毎日は召し上りかねて居る程の、旨い物を食べて居るやうな、貴族的の犬とか、或は、殿様のお伴をして、同族の兎や鹿を追ひ廻はしたり、雉や鴨を銜へて来るやうな、残忍な獵犬とかいふ、量見な犬ならば、それは十圓でも二十圓でも、取れるだけの税金をお取りなさいだが、僕等の飼つて置くやうな、主人思ひの犬、頼まれもせぬのに、警察の手不足を補つて、巡查の代理を勤め、泥棒の用心をする、勤勉な犬、僕等をして、不行届きな警察の力に、さ程の不満足をも感ぜしめないで、安んじて眠に就かせて呉れる忠義な犬、こゝろいふ犬にまで、高いく、無法に高い税金を課すといふのは、何たる不人情ぞ、何たる不犬情ぞ、何たる重税ぞ、何たる苛税ぞ、若し此くの如き課税にして、實際に行はれむか、

或人は、その税の重きに堪へずして、涙を吞んで、その愛犬の首輪を取り去るであらう。警察に出頭して、犬の戸籍を除くであらう。ア、この首輪なき犬、ア、この無籍の犬、彼は日を出でずして、野犬として捕へられ、飼養者なしとして撲殺せらるゝのである。ア、棄つるが是が、棄てざるが非か。犬一頭に、十圓の税金、二十餘圓の附加税は、あまりに高い。

東京市が、若しそれしきの目腐れ金欲しくば、多數市民が、欣喜雀躍して、その課税に賛成する、好個の税源はいくらもある。まづ第一に、自動車である。自動車に乗つて、人を挽き殺して歩かうといふ程の、没義道の間から、何程高い税金を徴収しても差支はない。自働車の横行するところ、沿道の児童をして、その贈を冷さしむるだけでも、大變な罪惡である。その横行するところ、雨には泥を飛ばし、晴には埃を揚げ、依つて以て、人の心を傷め、體を害するの罪、亦甚だ輕くない。又その横行するところ、沿道の人家、これがために震ひ、壁に龜裂を生じ、屋根の瓦次第に下にすべる。かゝることをも、計算し得べしとせば、その市民の蒙

る損害、實に測るべからざるものがあるのである。たゞ少數の贅澤屋のために、市民の大多數に迷惑をかける自働車の如きは、實に重税も苛税も、辭すべからざるものである。

次は妾である。蓄妾に課税するのである。元來、妾などを置くは、自働車に乗るのと同一以上の惡贅澤である。妾が必要か不要かといふことは、今は論ずるを要しない。妻君の外に、一人の妾さへ、言はむ方なき不都合であるのに、中には、二人も三人も妾を蓄へて置く、この道ばかりの英雄が居る。娼妓でさへ、藝妓でさへ、已に課税の目的物となつて居る以上、この妾といふ奴、見逃すべき理由はさら／＼ない。一人一年千圓位も課税して見よ、今ある妾宅の九部通りは、貸屋となつて仕舞ふにきまつて居る。これがために、中流以上の或る人々の家庭の空氣が、幾分かでも清くなるならば、それこそ、實に、望外の幸福ではないか。犬の如き畜生なんぞから金を絞らずに、人間の蓄妾から捲き揚げる方が、ずんと男らしくはなからうか。〔東京朝日新聞〕

十、年賀廢止と貧民救恤

去年十二月、押し詰まつた廿八日の晩、原町黨の旗頭、中川潜光君が、例の如く、ノソリとやつて來た。大晦日近い廿八日といふ大事な日に、商人の帳場へ腰を下ろして、優長な世間話、これが月並の商人なら、氣の毒ながら、下駄の真中へ大きな灸位は据ゑもしやうし、箒の二本位は立てましたらうが、そこは商人離れのした僕だ、諸拂は、例によつて、今日、すっかりこちらから持たせてやつて片をつけたし、書出しも全部書き了へたし、あたりまへなら、年始状でも書くべき時なのだ、が、今年、諒闇とあつて、僕の方からは、一切年始状を出さないといふことにしたために、實

は頗る閑散、誰か法螺の相手があるまいかと思つて居るところへ、ちよ
うど折よく御尊來、大にこれを驩迎した。

潜光君の氣焰、例によつて萬丈、四疊半の帳場ではとても收まり切れ
そうにもなかつたが、ゆくりなくも談は、年始状や松飾りのことに及ん
で、年始状を出すものが少くて、政府の収入も多少減じたらう。」とか、屋
敷向きでは、大抵、松飾りを止めたので、町内の鳶人足共が、困つて居ると
いふ話だ。」とか、いひ出す。「前田家などでは、松飾り全部を廢したゝめ
に、五百圓、年始の禮を止めたゝめに、舊藩士その他の年始客に對する饗
應費約二千五百圓、合せて約三千圓位の支出が減ずるそうだ。」東京中
の、華族や富豪全體に亘つて、松飾りや年賀を廢止したゝめに、節約せら

れた費用を計上したら、随分、莫大なものになるであらう。「吾々にした
ところで、年始状を出さないといふことにしたゝめに、二圓や三圓は餘
つて居る理屈だナア。」全體、華族や富豪が、かういふ場合に、かういふ事
情で從來全く例のない剩餘金が出来た譯だから、それをそのまゝにし
て置くといふのは、變なものだ。」東京市中だけでも、雑煮餅どころか、そ
の日くゝの暮しさへ出来ない貧民や労働者が、どの位あるか知れない。
この際、華族や富豪が、松飾りや年賀廢止のために生じた、使ひ道のない
剩餘金の幾分かを、貧民救恤のために、喜捨して呉れたらどうだらう。」
「名案々々、頗る名案。早速一つ、天下の問題にしゃうてはないか。それ
には、まづ、新聞の力を借りなければならぬ。よしッ、早速、何とかやッ

て見やう。」

此くの如くにして、潜光君の發案に、多少の修飾を施して、まづこれを『東京朝日』に交渉して見た。しかし『朝日』はどうもよく、問題の性質を理會して呉れなかつたが、兎も角も、僕に、一文を書いて送つて呉れ、さすれば、それを新聞に掲載しやうといふことになつたので、その夜のうちに、直に左の如きものをなぐり書きにして、杉村楚人冠君宛てに郵送した。

『諒闇中、年末歳始の禮を廢するといふ者と、廢しないといふものがある、これを廢しないといふ者は別として、これを廢するといふものに向つて一言したい。』

僕等のやうな素寒貧でも、年賀狀を出さないといふとすると、二圓や三圓の費用が省けるを以て之を推すに、天下の名士や富豪華族など、いふ階級の人々にありては、随分、多額の費用が省けるとてあらうと思はれる。縦令、年賀狀に要する費用は、さ程の多額でないにしても、夫の松飾りをせぬといふと、及び、年賀客に酒肴を出さないといふとに依つて省ける費用が、莫大なるものであるといふとは、想像するに難くない。聞くところによると、某華族が、松飾を廢したゞけても、優に五百金の費用が省け、又、年賀を受けない爲に、酒肴料が二千五百金も省けるといふとである。市中の華族や富豪が、悉くさうとは言へまいが、相當に暮して居る者は、年賀廢止のために、多少の費用を

節約し得て居るといふことは、この一例でも、疑ふことの出来ない事實である。

諒闇中、祝ひ事を廢するといふのは、たゞ、無暗にケチに、矢鱈にシミッタレルといふのではない。年賀状を出さなくて五圓助かた、松飾をしないので百圓残つた、年始客を斷つたので千圓餘つたと言つて、懐で勘定などすべき筈の者ではない。そこで僕は、この爲すべき筈のとを爲さないために生じた金圓は、これを何か、社會有用のことに、使用するにしたいと思ふのである。

社會有用の事と言へば澤山ある、しかし、差當り、このせち辛い世の中に、不景氣と米價暴騰との板挟みになつて、雑煎餅ところか、碌々と、

粥もすしりかねて居るといふやうな労働者や貧民に、何等かの方法を以て、これを分與するといふが如きは、最も時宜に適した處置ではあるまいか。

昔、鐵眼禪師、二度生きた藏經を作り、一度死んだ藏經を作つたといふ故事を學んで、大正の初年、吾等國民は、生きた年賀状を發し、生きた門松を立ててやうてはないか。』

越えて廿九日の朝、『萬朝報』社へ電話をかけて、大住嘯風君に、このことを話して見た。ところが、編輯局では、絶好の問題だから、大にやりませんが、しかし、『朝日』の方が一日早く書くやうては困りますから、どうか、三十一日まで待つやうにして欲しいといふ。成程、新聞社としては、當

然な申條だと思つたから、早速『朝日』へ電話をかけたが、杉村君が不在で、要領を得ない。一寸困つて居たが、幸にして、三十日の『朝日』には出なかつた。

三十一日の『萬朝』はその言論欄に於て、華族富豪に告ぐ「兄弟食を争ふ」先帝の御志の三項に分つて具に僕等の意見を發表して呉れたが、『朝日』の方は、何とも言はない。そこで、楚人冠君へ電話をかけて、様子を尋ねると、實は、君の文は、チャーンと組んでグラ刷が取つてあるのだが、三十日も三十一日も、紙面が平常の半分の四頁になつて居るので、如何とも都合がつかない、一月にでもなつたら出すやうにしよう。「イヤ、君の社で、この問題について、働いて呉れないのなら、僕の投書なんぞは、もう

出さなくともよい。」と言つたやうな事情で、『朝日』は立ち遅れる。『萬朝』は猛進する、而して、この細民に同情ある問題否、日本に於ける一大社會問題解決の鍵鑰は、遂に、『萬朝』の獨占に歸したのである。僕にせよ、潜光君にせよ、たゞこゝろいふ主張が、世間の華族や富豪に、徹底さへすれば満足なので、その『朝日』に依つて發表せられると、『萬朝』に依つて發表せられるとは、敢て問ふところでない。

爾來、『萬朝』は、市内の華族を歴訪し、且つ、避寒地に於ける華族をも訪うて、その賛同を得んがために數名の記者を、鎌倉、箱根、熱海等に特派して、連日その意見を公表し、『萬朝』が社會問題に對して、如何に忠實にして、且つ、勇氣あるかを示すと共に、世人は、等しく、『萬朝』が、弱者に同情す

る任侠の態度に嘆服したのである。

一月三日に、楚人冠君は僕の投書のゲラ刷を持つてやつて来た。その時分は、もう、この問題は、『萬朝』紙上の花となつて居た時である。桂公爵も賛成する、大浦内務大臣も賛成する、秋元子爵も、渡邊子爵も、苟も、華族階級の名士は、悉く大賛成で、中にも、酒井伯爵の如きは、自らこの問題を提げて、同族間を遊説しやうとさへ言つて居られるといふ程の大賛成、潜光君も僕も、愉快満足、真に言はうやうがない。

但、僕の希望は、單に、華族だけでなく、濁富の徒をして、この際、大にこの舉に賛成せしめたいと思つて居たのだが、『萬朝』では、特に「華族と貧民」と題して、華族だけに限つたのは、聊かもの足らない。しかし、これは、新

聞社の都合であつて、僕等素人の、輕々に容喙すべき事柄ではないかも知れない。

時恰も、國技館の角力期に入り、滿都の人心、擧げて兩國橋畔に集まる、新聞社たるもの、また、この一年二回の好問題を、閑却することが出来な
い。そこへ持つて来て、憲政擁護、閥族退治の大運動開始せられ、全國新聞記者大會の開會となり、新聞記者たるもの、ますく多忙の時期となつて来たので、自然、「華族と貧民」の問題も、一時休止の已むなきに立ち至つたらしいが、この問題の結果を、如何に處理するかは、天下の等しく知らむと欲するところであつて、『萬朝報』の責任は、決して輕くない。冀くば、有終の美を收めて欲しい。

想起す、昨年の三教會同事件に、叛旗を翻して、大に破壊的運動を試みたその發端は、實に一月五日のことであつて、僕の廣長舌莊に、これも原町黨の重鎮たる、稻葉君山君と、『萬朝報』の大住嘯風君と落合ツタ時である。彼と言ひ、之と云ひ、共に原町黨の帷幄に胚胎して、雞聲堂の樓上と帳場とて産聲を揚げたといふことは、原町黨の面目、雞聲堂の光榮、實にこの上もないことである。殊に、彼も此も、共に、大住嘯風君を透して、『萬朝報』の多大なる活動によつて、成功したことを思つて、僕等は、深く『萬朝報』を徳とせざるを得ない。

昨年の運動は、消極的で破壊的であつたが、今年の運動は、積極的で建設的である。僕等は、かゝる問題を社會に提供したといふことに依つ

て、今年も亦、堂々として、この世に生存するといふ權利を、獲得したやうな氣がするのである。(大正二年二月の『新佛教』)

▲排日問題と日本國民の同化性

北米加州人の排日運動が、全米國民の意志を代表する者であるかどうかは、多少の疑問がないでもない。最初は、加州選出の議員が、選舉權を有する、多くの外國労働者(日本以外の)に對する、御機嫌取りに、チヨイと日本労働者排斥といふやうなことを、持上げて見た位のものであつたのかも知れない。そこへ持つて来て、「彼等は異教徒である」といふ宗教的偏見と、「彼等は黄色人種である」といふ人種的偏見と、「彼等は頑固なる愛國者である」といふ國民性を無みせむとする偏見とが加はつて、遂に今度のやうな、大問題になつたのではあるまいか。殊に、日本人の忠君愛國的思想が、他の如何なる國土に住するも、毫も變化を來すことのないといふこと、佛敎の信仰を捨て、基督敎の信徒とならな

いといふことゝは、頗る米國民の御機嫌に逆つた點であるらしい。若し、果して、かゝる理由の下に、排斥せらるゝものとせば、日本人は、寧ろ、これを光榮としなければなるまい。

しかし、僕等の見るところでは、由來、日本人程、同化性に富んだ國民はないかと思つて居る。佛敎が渡來すれば、忽にして全國限なく普及するし、儒敎が來れば、上下翕然としてこれに赴くし、基徒敎のやうに、一部の論者からは、日本建國の精神と相容れない邪敎であるときへ罵られて居る宗敎さへ、今や侮るべからざる勢力を得て居る迷信だ淫祠だと、攻撃されて居た天理敎さへ、今や神道各派中、最も有力なる一派となつてしまつたし、思想界に於ても、常に西人の思想に同化するといふこと以外、まだ何等獨創の見を發表したものが無いし、經濟の上でも、殖産興業の上でも、何一ツとして、日本人が、西洋に同化しないといふ點があるだらうか。早い話が、日本人の西洋に在る者は言ふまでもなく、内地に於てさへ、洋服を着し、洋食を食ひ、洋館に住し、自働車に乗つて居るものも少

くないのに、西洋人にして日本に在るもの、誰かは日本服を纏ひ、日本食を食ひつゝあるものがあるか。否、日本の男子にして、西洋の女子を妻とせる人々の家庭の有様を見聞しても、全く妻たる西洋女のために征服せられて、聊かも、夫たる日本男の勝利を認むべき點がないのである。擧げ來つて、たゞ、日本人の同化性の強いといふ事實を、證據立つる材料の多いのに、驚くのである。僕等は、米國に於て、僕等の同胞が、排斥せられて居るといふことを悲しむよりは、寧ろ、僕等の同胞が、同化性の餘りに強いのを悲しむ時機の到來することを恐れなければなるまい。

理窟はどちらにしても、事實上、僕等の同胞が、排斥せられて居る以上、吾が日本國民は、極力これと抗爭して、その權利を伸張し、その威力を示さなければならぬ。勿論、權利を伸張し、威力を示すと言つても、一派論者の唱ふるやうに、直に、最後の手段に出なければならぬといふのではない。まづ第一着手として、歸化權を獲得するといふことが、何より大切な仕事である。日本國民が、米國民

ことではないか。日本の基督教徒は、まづこの點に向つて、米國民の謬見を打破することに努力すべき責任があるべき筈である。敢てその反省を促して置く。
(七月八日)

題後

米峰

會	聞	物	不	得	平	鳴
鬱	勃	胸	中	奈	此	情
假	酒	忘	憂	非	我	事
驅	毫	嚼	豆	罵	人	生

米峰の文と想とに定評あり、僕の喋々を以て其價を動すに足らず。

たゞ僕が米峰と交ること殆ど二十年、試に見る所を述べんか。彼もと能文の士、その辯の「廣長舌」なるが如く然り、一日も筆を執らずして過ぐること能はず、而かも其綴る所、世上輕薄才子の文と同じからず、彼の經歷や幾多の「惡戰」に健闘し、「進修」の大旆をかざして、不斷に努力して今に至りぬ、見るべし、其文章の重厚、由りて來る所あるを。加之、彼の批評眼は炬の如く、彼の志氣は經世に在り、此志氣と炬眼とを以て文を行ふ、その尋常閑文字と同一視すべからざるを知るべし。更に彼の性情の熱烈なる、その物に觸れ事に接して發する所、猛然抑ふべからざるものあり。宜なり、「噴火口」の名あることや。その世人を警醒し、深省せしむる

は、僕の保證する所なり。僕が敢て茲に此證言をなすものは、彼の平常に徴して、決して謬ることなきを確信すればなり。

大正二年八月中浣

田中我觀

火山の噴火口は、地球の内部に鬱積する猛烈なる地熱を放散するものとして、予は甚だ小に過ぎざる可きかを想ふ。地球の表皮に存在する火山は、陸地なると海中なるとを問はず、其數必ずしも少なからずと雖も、而かも地球の内部に存する地熱を、悉く放散し盡すに足るほどに多數なるに非ず。エトナ山の長き噴火と雖も、ヴェスヴィヤスの強激なる爆發と雖も、淺間、阿蘇の間斷なき噴火と云ふと雖も、地熱は恐らくは決して其大部分を放散し盡すことを得ざるべし。

フェヒテルの世界觀の如く、若し地球にも靈あり心ありとすれば、火山の噴火は、蓋し地球の心に鬱積せる、不平不満の一部を發漏する所以ならずんば非ず。淺間、阿蘇が特に大いに爆發し、轟然石を飛ばし瓦斯

を吹き、蒸氣を吐きラバを流すは、即ち是れ地球が平常茶飯の不平に飽かずして、時に大いに不満を漏せるものとも見るを得ん乎。

然れども地球は大い也。太陽に比し又他の恒星に比すれば、固より大を宇宙に誇るに足らずと雖も、此地上の生活よりして見れば、方にこれ地球は大い也。此大いなる地球の不平不満を吐く所以の漏口としては、夫の噴火口は是れ甚だ小に過ぐ。恐らくは地球彼れも亦、其小を知つて以て時に之に不満なきにあらざる可き乎。然り、故に時に彼の火山此の火山に於て、臨時の大爆發を試み、以て其噴火口を大にすることを計れり。地球彼れ亦甚だ知と云ふ可し。

予想ふに、高島米峰君は地球の如き人なり。是れ君が僧侶の子と生

れて頭の丸かりしに因つて、其相似たるを見て以て云ふ所に非ず。君が久しき前より噴火口を有し、時々不平を漏し不満を語りて、宛として地球の火山に於けるが如し、而して今や亦臨時の大爆發を試みて以て一篇の『噴火口』を著はし、轟々として蒸氣を發し、瓦斯を吹き、石を飛ばしラバを流すの偉觀を作せば也。其行其知、甚だ相似たらずや。

而かも君の噴火口に漏す所のは、是れ必ずしも君が滿腔の經綸にあらず、理想にあらず、又其全哲學にもあらざる可きこと、亦是れ地球の火山よりして吐く所の地熱の放散が、必ずしも其全幅のものならざるに同じからん。果然君も亦、地球の大いなるが如く大いなる人ならんばあらず。其大いなる人の噴火口より發する所の火は、即ち是れ

大いなる地球の噴火山より吹く所の火の如く、其全幅のものならずと雖も、而かも亦誠に偉觀を極むるものならずんば非ず。

或は云はん、噴火口と云ふ、誠に云ふが如く不平不満の爆發なり。果然是れ憤怒にあらざや、徳たる能はざるものにあらずやと、予は之に對して、予の最も好める哲學者の説を語らざる可からず。

憤怒の道德的價値は、必ずしも單純なるものに非ず。醫師は病人に怒ること勿れと命ずれども、十二分の健康を有する者は、其強健を漏す所以なければ却て不衛生となる可し。憤怒も強健至極の人に取りては不良事にあらずと雖も、虚弱の人、病人、婦人等にありては、即ち甚だ不善たる也。果然佛教の所謂瞋恚を戒むる所以のものは、道德的と云は

んよりも寧ろ衛生的の教訓と云はざる可らず。若し夫れ最も強健の心を有し、最も健全なる思想を有する人ならん乎、世の誤れるに對し、人の正しからざるに向ひて、以て大いに之に憤り、大いに之に怒らざる可らず。此種の憤怒は強健なる精神の一爆發なり。健全なる思想の一發漏なり。公共の怒り也。正大の憤り也。夫の地球の火山に於ける一大噴火ならずんば非ざる也。斯の如き憤怒は、嘗に之を爲す其人の鬱積を散じて以て衛生に佳なるのみならず、又其公私兩様の徳に於て甚だ可なるものある也。

予は高島君の『噴火口』に對して斯の如くに思ひ斯の如くに感ず。而かも地球が其大いなる地熱の全部を放散するには、火山の噴火口に

ては甚だ小に過ぎざるかを想はしむるが如く、君の「噴火口」も亦君の大きいなる思想を噴火するものとしては、甚だ小に過ぎざる可きかを疑はざる能はず。惟ふに爾後君は更に其噴火口を大にし、二たび三たび四たび五たび、益す多く噴火する所なかる可からず。予は其ヴェスガイヤスもエトナも、恐らくは及ばざる偉觀を、永久に見んことを希ふもの也。

大正二年八月

久津見 蕨村

噴火口！ 氣焔萬丈の壯觀を見せた昔しの名残りとおつては、富士山嶺の八峯に等しく、東海に聳えて遠く太平洋を睥睨すると威張つても、徒らに六根清淨ならざる輩が蹴落す飛礫に、眼潰しを食ふに過ぎぬ。時に噴き出して、灰神樂を娑婆に浴せることあるも、怪し淺間のむか腹躍起ては、大千震動の活劇はをろか、鼠一匹の景物も出まいし、間違へば、寶永の痰瘤を額口に遺すに落ちる。所詮は口を噤んで、閻王の苦蟲を氣取つてをさまるか、大々的に俗塵を吹き倒して、風の神の向うを張るか、雜木山は雜木山らしく、禿山は禿山だけにあればいゝのであるが、米峯はたゞの山ではない。一夜越後の片隅から、江戸は白山の隣りに引越し、別に鎮守といふでもないが、帳場に坐つて原町を知し、何でも來い

の土壤を譲らず、いづれは大を成すかもしれぬが、とかく筋張りかへると至つて強く、匹夫も志を奪ふべからずなどと、云ふも云はぬも固くなる。かゝる時んば、性の悪い腫物同然、どこへどんなに吹き出すかわからぬ。痲酔療治は無論のこと、下手な吸ひ出し位では散りさらぬといふ始末、これがこの山の噴火なので、随分と暗も照すが空も焼く。但し、火傷の憂は毛頭無用、一向怖れるに及ばない。火を吹いた揚句に涎を流してゐる位だから。米峯火口の健全を祈つて、又も噴き出す折を待つまで、灰左様なら。

大正二年八月九日

仙臺客舎にて 藤岡 渴耳

大正二年九月七日印刷

大正二年九月十日發行

『大正文庫』第七編

定 價 金 八 拾 錢

發 著 者 兼

高 島 大 圓
東 京 市 小 石 川 區 原 町 六 番 地

印 刷 者

佐 久 間 衡 治
東 京 市 京 橋 區 西 錦 町 廿 七 番 地

印 刷 所

英 會 社
東 京 市 京 橋 區 西 錦 町 廿 七 番 地

不 許 複 製

發 行 所

東 京 市 小 石 川 區 原 町 六 番 地
振 替 東 京 一 五 六 八 六
電 話 番 町 二 六 〇 八

丙 午 出 版 社

大正文庫

- 文學博士三宅雪嶺先生著(定價五十錢郵稅六錢)
第一編 明治思想小史
 文學士 沼波瓊音先生著(定價七十錢郵稅八錢)
第二編 此 一 筋
 新佛教徒同志會編(定價七十錢郵稅八錢)
第三編 來世の有無
 大内青巒先生著(定價六十錢郵稅八錢)
第四編 禪の極致
 黑岩周六先生著(定價六十錢郵稅八錢)
第五編 予が婦人觀
 釋清潭先生著(定價六十錢郵稅八錢)
第六編 狐禪狸詩
 高島米峰先生著(定價八十錢郵稅八錢)
第七編 噴火口
 杉村楚人冠先生著
第八編 旅
 佐々木照山先生著
第九編 散 彈
 加藤咄堂先生著
第十編
 文學博士 村上專精先生著
第十一編 人間萬事廿年
 內田魯庵先生著
第十二編 紅茶 番茶

佛敎講義錄

僅に一ヶ年で佛敎の學界空前の佛敎講義錄
 大系が學び得られるは日本の歴史の解釋が出来ない日本の文學も味ふことが出来ない日本文明の由來するところも知ることが出来ない従つて佛敎を知りたいといふ人は多いが唯讀三年俱舎八年では手もつけられないそのことが出来ないので手つ取り早く佛敎の大系が飲み込めるやうにとしたので現代有数の學者に請うてその専門とするところの學科の講義をして貰ふことにしたのである世の徒に大家の名を列して杜撰な代作講義を掲載するが如きものと同一視することなからせよ

佛敎研究法	東洋大學教授 島地 大等	法華經義釋	天台大學教授 島地 大等
佛敎概論	宗敎大學教授 加藤 咄堂	佛敎美學	帝國大學講師 加藤 咄堂
印度の佛敎	宗敎大學教授 荻原 雲來	佛敎美術	帝國大學講師 中川 忠順
支那の佛敎	東洋大學教授 境野 黃洋	宗敎學要義	眞言大學教授 融 道玄
日本の佛敎	豊山大學教授 境野 黃洋	基督教綱要	慶應大學教授 廣井辰太郎
歐米の佛敎	宗敎大學教授 渡邊 海旭	神道綱要	東洋大學教授 足立栗園
佛敎の經典	帝國大學講師 常盤 大定	其他臨時講義	を増加すべし

毎月一回十五日發行、一冊菊判二百頁、滿一ヶ年(十二冊)完結

合	計	一	冊	五	圓	十	錢
東	修	五	圓	十	錢	二	圓
購	料	六	圓	十	錢	一	圓
半	年	分	三	圓	十	錢	三
一	年	分	五	圓	十	錢	五
完	結	一	冊	五	圓	十	錢

『萬朝報』記者 大住晴風先生著
現代思想講話

定價金一圓廿錢
郵税金八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむにはまづ其の思想の由來せる傳統を究め進んでゼームス、オイケン、ベルグソンの如き現代思想を代表する大思想家の説くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ深遠なるその根本思想を捉へ來りて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を養ひ人生の意義を了得せしめんとす洵にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

暮村隱士 久津見廣村先生著
現代八面鋒

定價金八拾錢
郵税金八錢

物平を得ざれば則ち鳴る而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせず之を發して八面に當り散し十方に喝破すその鋒先の向ふところ女優あり倫理あり藝者あり教育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗教あり眞にこれ多角多趣味の一大珍書

暮村隱士 久津見廣村先生著
眞人偽人

定價金壹圓
郵税金八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の嚴命を蒙ること亦數次聊か瘡癩を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揚げ偽人はこゝにその面皮を剥かるその論辛辣その評深刻洵に筆端風を生じて文に聲あるの概あり

堺 利彦先生著
樂天囚人

定價金六拾錢
郵税金八錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉妬、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらるる社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之を一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

賣文社社長 堺利彦先生著
賣文集

定價金壹圓
郵税金八錢

餘韻之飾 著者の友人先輩六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短酷落奇抜痛快の評語 序 賣文社の記、著者自ら其の事業を語る 第一編 一、唯物的歴史觀 二、子に對する態度 三、宗教とは何ぞや 四、木下尚江君を評す 第二編 一、暮春の古服 二、子の夢 三、墓地見物 四、寸馬豆人 五、逆徒の死生觀 六、死の趣味 第三編 喜劇「谷川の水六バード、ショウ原作」 第四編 一、告白、荒畑寒村 二、クレンクビユ、大杉榮 三、謀叛人耶蘇、高島素之

堺 利彦先生譯
ルソー 赤裸の人

定價金九拾錢
郵税金八錢

佛國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソーの「エミール」によりて啓發せらるる波瀾重疊神出鬼没の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは達識能文の堺利彦先生なり一讀してルソー前に立てるの感を引きしむ

カウツキー先生原著
堺利彦先生譯
社會主義倫理學
定價金壹圓
郵税金八錢

哲學界には迷妄にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本能主義が流行し宗教界及び教育界には淺薄にして偽善なる因習道徳が唱導せらるゝ今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の蒙を啓き此の味を照すは譯者が深く痛快とする所なり著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるゝの日本人の學界と文壇とは遂に此書を無視すること能はざるべし(譯者)

幸徳秋水が最後の文章
基督抹殺論
定價金七十錢
郵税金八錢

一代の論客として知られたる幸徳秋水も誤つて天地の容れざる大逆無道を企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に呻吟せるの間特に此一巻を著す所論痛絶快絶行文悲絶憤絶嗚呼幸徳秋水死に臨みて基督を抹殺し了せむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の憎讀を費ふ

文學士 渡邊又次郎先生著
最新論理學
定價金一圓廿錢
郵税金拾貳錢

本書は新學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして内容の整頓せる簡潔なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要な題目を掲げ卷末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

加藤 鳴堂先生著
筆と舌
定價金七十錢
郵税金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として實説と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實驗談は正に現代の青年を奮起せしむるに足る大文字なり

村上 博士序
藤井 瑞枝女士著
亂れ雲
定價金八十錢
郵税金八錢

才筆明治の清少納言俠氣女次郎長の稱ある女士が舊組織舊道徳に對する呪咀叛逆の聲を聴け

「無我愛」首唱者
伊藤 隆信先生著
新氣運
定價金八十錢
郵税金八錢

斷然傳習と教權の束縛より脱却して世の罵詈褻笑輕侮憎惡の中に立ち臆面なく忌憚なく無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの!

<p>三宅雪嶺先生序 高島米峯先生著</p> <p>廣長舌</p> <p>定價金七十錢 郵税金八錢</p>	<p>加藤弘之先生序 高島米峯先生著</p> <p>惡戰</p> <p>定價金八十錢 郵税金八錢</p>	<p>島田三郎先生序 高島米峯先生著</p> <p>理想的商業</p> <p>定價金二十五錢 郵税金四錢</p>
<p>加藤咄堂先生曰はく「米峯今胸中鬱物の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企だて及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を通して當世人士の肺腑を刺る洵にこれ堂々當世の大文字」と</p>	<p>著者曰はく「これ僕が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく職なく疎に加ふるに資金なく後援なき裸一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と</p>	<p>賣ると買ふとは對等なりお客成服つて商人屁こ垂れること甚だ道理なしそれ賣るに法あり買ふに道ありこの法を説きこの道を教へ以てお客様といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものにはうんと買へと勧め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは即ちこの書なり</p>

<p>前外務大臣 伯爵 林董閣下序 東北大學 教授 林 董閣下纂譯 學總長 千河岸貫一先生著</p> <p>修養史譚</p> <p>定價金壹圓 郵税金八錢</p>	<p>前外務大臣 伯爵 林 董閣下纂譯</p> <p>修養の模範</p> <p>定價金七拾錢 郵税金八錢</p>	<p>文學博士 村上專精先生著</p> <p>通修養論</p> <p>定價金壹圓 郵税金八錢</p>
<p>林伯爵曰はく「此の書を讀くに古今東西の史乘より異世同轍の事實二百對を擧げたる者にして教師これを用ひば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらむ」と</p>	<p>家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では教師が生徒にする話材の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する美談の乏しいのに窮り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを歎いて居る譯者これを憂へ書を讀む毎に精神修養の模範とするに足るやうな英談逸話を翻譯摘録して遂にこの書を成すに至つたのである弊社今こゝに世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である</p>	<p>古理實踐の芳躅を辿り前賢研究の結果を收め苟も規箴とするに足るべき名論金言は悉くこれを投引して依て以て極めて平易に修養の理論を説明し苟も模範とするに足るべき華行美談は悉くこれを蒐録して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す恐らくはこれ斯界未だあらざる特別完備の修養書たらむなり</p>

文學博士 村上專精先生著
改訂 增補 自信錄
定價金 六拾錢
郵税金 八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披露すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此の書によつて窺ふべく教處なる佛敎信者の態度は此書によつて知るを得べし

文學博士 村上專精先生著
誠のしるべ
定價金 四拾錢
郵税金 八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道徳も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

文學博士 村上專精先生著
女性訓
定價金 四十錢
郵税金 六錢

本書の内容は天職中庸質素謹節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女性の缺點を握み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡そ世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

スタンフォード大學總長
マスタール、オプ、アーツ
中村 平先生譯
人物の修養
定價金 五十錢
郵税金 八錢

澤柳前文部次官特長に長文の序を草す其の一節に曰く、「ジョルダン博士は當今世界有数の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり我國人がその所説その意見を知らむと欲するの情並に之を知ること依て利すること尠からざるは言を待たず：我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

ウキリヤム、ハイド氏原著
鈴木券太郎先生譯補
處世 自己測量
定價金 五十錢
郵税金 八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我が邦現代の社會に薦めむとするもの他なし吾人が惡徳邪僻の根柢人格完成の砥礪立身處生の嚮導社會道徳の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年卿等がこの生活難の世に處して新しき運命の祕府を開くべき鍵はこゝにあり

黒岩 周六先生講演
人生問題
定價金 五十五錢
郵税金 八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を説き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黒岩先生自ら人生問題に達達して疑問の源泉を探り大に其深蘊を得て茲に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天賦の妙音なり世の悶ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と満足と活力とを得て潤く且つ光ある人生に觸着することを得ん

東北大學總長
澤柳政太郎先生著
退耕錄
正價金壹圓
郵税金八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尙ほ腹ふくるゝ心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實際上百餘の問題に達着して滿腔の所感を披瀝したるものなることを窺ふあり感懐あり痛罵あり氣焔あり理窟あり善法にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる斷案あり言はんと欲する所は言ひ盡くして尙も時勢に阿らず誠に憂國警世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

フニヒチル先生原著
文學士 平田元吉先生譯
死後の生活
定價金五拾錢
郵税金八錢

本書は現世の事實を基とし最高の詩的想像を涉へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱横に叙述したる詩と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は親愛者を失ひし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を配ち又學者研究者に豊富なる暗示刺激を與ふるや疑ふ可からず

ペークマン先生原著
杉村縱横先生譯補
改訂強 **肺術**
定價金四十錢
郵税金四錢

肺病を恐るゝものは讀め肺病に罹れるものは讀め歐米に於ける最新式の體力養生法を讀め此書に六の特色あり 第一、時間を要せざること 第二、費用を要せざること 第三、場所を要せざること 第四、努力を要せざること 第五、言文一致なること 第六、總ふり假名付なること 故に男子は勿論婦人小兒と雖も容易に實行し而して確實に其功を收め得べし

文學博士 井上圓了先生著
南半球五萬哩
定價金九十錢
郵税金八錢

南半球を一周し赤道を四週し濠洲南阿南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峡まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺憾なし挿畫五十幅上更に花を添ふ

文學博士 井上圓了先生著
活佛教
定價金壹圓拾錢
郵税金八錢

明治の宗教界思想界を震撼せしめたりし「佛教活論」は完成す僧侶の活躍寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛敎をして活佛敎たらしむるの圖書

帝國大學教授
文學博士 高楠順次郎先生著
國民と宗教
定價金七十錢
郵税金八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳説せられたる新著也苟も日本の國民たる者日本の宗教の理想を一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる語體なれば又以て演説講話の好模範たるべし附録として研究上修養上極めて重要な論文數種を收む悉く學界の珍

文學博士 松本文三郎先生 闕
文學士 羽溪了諦先生 著
釋尊の研究

定價金 壹圓
郵税金 八錢

本書を釋尊以前の婆羅門教の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に説き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脱の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の議論を跋る説に教界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

京都帝國大學文科大學長
文學博士 松本文三郎先生 著
彌勒淨土論

定價金 壹圓
郵税金 八錢

宗教學上殊に佛敎史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要な地歩を占むるものは一淨土の思想一なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明によりて尤輝を放てるも其他の半面は「彌勒淨土」の理説によりて全然暗黒に歸すこれ豈佛敎史上の一大缺點にして又實に佛敎界の一大恨事ならざや松本博士多年の遺著を傾けその專攻する學科の立脚地より「彌勒淨土」の由來淵源を詳論し博士の著「極樂淨土」と相待つて茲に佛敎の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして恣に佛敎の淨土思想を談ぜんとするものぞ

ポール、ゲーラス先生著
學習院教授 鈴木大拙先生 譯
阿彌陀佛

定價金 三十五錢
郵税金 六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛敎の根本問題也ゲーラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評噴々たることや弊社に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙先生を煩はして此和譯を得たり豈嘗に佛の有無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

東京帝國大學講師
文學士 常盤大定先生 著
釋迦牟尼傳

定價金 七十錢
郵税金 八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳説なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖是等の傳説が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳説の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照して此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り

文學博士 遠藤隆吉先生 著
孔子傳

定價金 壹圓四十錢
郵税金 十二錢

その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豊富にその觀察極めて鋭利にその論斷極めて正確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未言の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ

高等師範學校講師
互理章三郎先生 著
王陽明

定價金 一圓五十錢
郵税金 十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百般の問題を解決し盡くして遂に悟微の妙境に入る豈偉ならざや本書はこの王陽明の人格を主題として其の實生活と學説とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しかの歷程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

東洋大學講師
境野黃洋先生著
增聖德太子傳
定價金五十五錢
郵税金八錢

佛教史家として夙に令名ある境野先生が其の熾辱なる史蹟と開闢せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所

大内青柳先生序
高島米峰先生著
一休和尚傳
定價金九十錢
郵税金八錢

元日に觸體を振廻はして人の度臆を抜き末期に莢を啼つて梵天に捧げた彼一休後小松帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうとせず一簑一笠たぞ平民的教化のために一生を送つた彼一休痴か狂かはた一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

曹洞宗大學教授
忽滑谷快天先生著
達磨と陽明
定價金七十五錢
郵税金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を啓開して餘蘊なく進徳の工夫修養の方法爲學の用心精神鍊磨人格養成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道徳の指導者たり

明楊起元評註
加藤唯堂先生和譯
和譯維摩經評註
定價金七十錢
郵税金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して新經の哲理と文學とを闡明したるものを更に加藤唯堂先生が平明暢達の文を以て之を和譯し傍註を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び譯を談せむと欲する者には勿論講習本として亦最も適當なり

加藤唯堂先生著
原人論講話
定價金六十錢
郵税金八錢

佛教典籍多しと雖も之れを儒道二教の教義と比較して佛の嶄然一頭地を抜く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし、著者今獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ髓頭には添ふるに古人の解説を以てしたれば佛教の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

加藤唯堂先生著
通俗講話の理方法
定價金九十錢
郵税金八錢

通俗教育の必要日に通りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豊富なる經驗とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聽者を感じせしめ得べきかの理論と方法とを極めて親切に解説し多くの例話を擧げてその使用法を示されたるものなれば教化の秘訣維摩の奥義講話の資料收めて一巻の中に在り苟も講壇に立たむと欲する人一たび本書を讀かむか忽にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

東洋大學講師
釋 清 潭先生著
寒山詩新釋
定價金五十錢
郵税金八錢

是れ佛か是れ仙か是れ狂漢か得て解すべからざるものは寒山詩なり是れ韻語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑問牢固として抜けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

東洋大學講師
釋 清 潭先生著
和漢高僧名詩新釋
定價金五十錢
郵税金六錢

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉たり、和は虎關以後絶海戰堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり、其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの清秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と韻法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩篇を釋義して此の如きもの恐くは曠前なるべし

慶應義塾大學教授
忽滑谷快天先生評釋
和名士參禪集
定價金五十錢
郵税金八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黃山谷蘇東坡白樂天張翥張翥休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大徳の錯鑿に接するを得しむ

マクス、ミユラー博士原著
文學士 清水友次郎先生譯
宗教學綱要
定價金五十五錢
郵税金八錢

清水學士佛教大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マクス、ミユラー博士の原著を講本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良書なり

第三高等學校教授
文學士 野々村直太郎先生著
宗教と倫理
定價金五十錢
郵税金八錢

正にこれ新宗教論なり新道徳論なり而してまた實に人世問題最後の解決書なり世の靈と肉との饑渴に悩める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教と舊道徳とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附録には二宮尊徳翁の宗教論を評す

眞宗補教 北條蓮華先生著
眞宗の教義
定價金二十圓
郵税金十二錢

眞宗は實に日本佛教の精華にして又實に日本佛教の最大勢力なり本書は博識篤學を以て聞えたる北條師が多年の蘊蓄を傾けて宗祖親鸞上人を中心とし其師法然上人と其資蓮如上人と其教義を信仰上より研究したる結果を組織的に叙述したる者なり他力教の秘奥を探り本願寺の盛なる所以を知らむとする者の必讀を冀ふ

ア、エフ、ステンツラー先生原著
 エル、ピツシエル先生増訂
 ドクトル、フイロソフイエー
 萩原雲來先生譯補
梵語入門
 定價金壹圓
 郵税金八錢

一部人士の梵語を學ぶ者あるも彼等は咸な歐語の梵文典を使用すされど
 歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學はざる可からざる不便あり第二價格
 低廉ならず以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初歩たらしめむ
 がために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は
 僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

文學博士高橋順次郎先生閱
 曹洞宗大學教授
 立花俊道先生著
巴利語文典
 定價金壹圓
 郵税金八錢

著者南天楞伽島に入りスマンガラ僧正の會下において巴利語を修むるこ
 と多年、其平生手記する所と迦旃延以下原語の文典と歐洲人の手に成れ
 る巴梵兩語の語典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり、叙述の前後
 には多大の注意を拂ひて簡より繁に入り、易より難に進むの方法に従ひ
 たれば初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶
 たるべし

慈雲尊者眞錄
 高橋順次郎先生序
 阿彌得壽先生著
悉曇阿彌陀經
 定價金壹圓
 郵税金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘
 經なり。特に悉曇と冠語せしは新體梵字に簡ばんが爲なり。梵文に加ふ
 るに漢字羅馬字書を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をもあげ終り
 に訂正本、辭書、唐秦二譯を掲げたり學者此の書によらば悉曇學の一端
 を窺ふに易からん

平子鐸嶺先生遺著
補校 上宮聖德證註
 正價金一圓
 郵税金八錢

「上宮聖德法王帝說」はその紀事切實その文詞醇古多く學業已往の記録を
 取つて正史の闕を補ひ誠に史家必讀の書たること今こゝに贅するを須む
 らず而して狩谷校齋先生の「證註」に至つては群說を折衷し正誤を辨別して
 先人未發の見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尙多
 少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子鐸嶺先生博覽強記にして史
 眼犀利校齋先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ誤れるを訂し足ら
 ざるを補うに錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

文學博士村上專精先生編
科註 原人論
 定價金十二錢 郵税金二錢
科註 大乘起信論
 定價金十六錢 郵税金二錢

この二書は共に筆記書入れ等に使せんがため本文の上下に空白を存し置
 きたれば學校の教科書學會の講本として最も適當なり

高島米咩先生著
學考 東洋史
 定價金十三錢
 郵税金二錢

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべか
 らむも學生を資くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑
 はざるなり」と

文學博士 三宅雪嶺先生著
偉人の跡
定價金壹圓
郵税金八錢

古今東西の偉人數十名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を明にす觀察警抜にして行文微妙今の時代の眼に映じたる偉人の眞面目は躍如として茲に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せしか社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば冀くは此の偉人の偉著に問へ

文學博士 三宅雪嶺先生著
小泡十種
定價金四十五錢
郵税金八錢

博士の學殖富贍に博士の見識卓越に博士の文章超凡なると世既に定評あり今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を説き文學を語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては浩渺盡きざる大河となり散じては繽紛限りなき飛沫となる小泡が激湍か蓋し近代稀有の快著也

文學博士 三宅雪嶺先生著
明治思想小史
定價金五十錢
郵税金六錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生今や思想の最高境に立つて明治思想の變遷を語るまづ明治以前の思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深刻の觀察を逞しうして剴切の結論に到る今や大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大發展が果して如何なる思想の産物なりしかを知識して依て以て第二の維新を大成せざるべからず果して然らば此書これ眞に大正國民必讀の書

文學士 沼波瓊音先生著
此一筋
定價七十錢
郵税金八錢

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはゾクゾクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそなたの方にのみ、これを侷む。」と本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と

新佛教徒同志會編
來世之有無
定價七十錢
郵税金八錢

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するの滅しないのか元來吾等に靈魂などいふものがあるので無いか凡そ此くの如きの難問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑問も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

高島米峰先生著
現代青年論
定價十五錢
郵税金二錢

本書は著者が某會社の青年に向つて講演せるものゝ筆記にして各種青年會などの施本として最も適當なり内容目次左の如し
一、青年の力―二、今の青年は依頼心が強い―三、今の青年には氣概がない―四、今の青年は成功を急ぐ―五、今の青年は一事に精しくなくて多岐に勞する―六、今の青年は思想が羸弱である―七、今の青年は信仰が乏しい―八、今の青年は同情が乏しい

大内青巒先生著
結城素明畫伯畫
禪の極致
定價六十錢
郵税八錢

不立文字の教理も、文字に依らざれば知ることも能はず。以心傳心の妙詩も、言語を離れては傳ふること能はず。但借しむ、古來禪を説くもの、徒に難解の語句を弄して、人をしめて愈々出て、愈々迷はしむることを。大内先生學深く徳高く、教禪二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗話を以て、幽玄の理を説き、深遠の法を語ることを、殆ど天下獨歩、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附録「五位顯講話」また先生獨創の只識を以て、縦横に講解す、蓋近來の大文字なり。

二四

黒岩周六先生著
予が婦人觀
定價六十錢
郵税八錢

進歩的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黒岩先生の婦人觀はトルストイ的の絶對貞操觀に配合するに經濟的獨立の實際問題を以てし種々様々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子教育家の精讀を冀ふ

記者壹月、唯堂、我觀、米峰、黃洋、縱橫、秋畝、大拙
月刊
雜誌
新佛教
一冊十六錢
半年分一圓十錢
一年分二圓

「新佛教」は自由討究傳説排斥の大義に基き吾人の全精神を満足しつべき新信仰を鼓吹し今日の時世に適應すべき新道徳を扶植せむとするものなり
「新佛教」は光明を求め大道を傳ふ法を賣り道を嚙くものにあらず
「新佛教」は自主獨立能く言ふべきを言ひ語るべきを語る他の保護の下に踴躍して言ふべきを言ひ得ず語るべからざるを語るが如き者にあらず

釋清潭先生著
狐禪狸詩
定價六十錢
郵税八錢

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の窠狸詩の窟一躍して之を壞る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今や裝成りて人間に横行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしといそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

釋清潭先生主筆
月刊
雜誌
漢詩
一冊五十錢
一年分一圓五十錢

釋清潭先生を中心とせる漢詩園淡社の機關雜誌にして毎號「作詩法講話」「三體詩講話」「陶淵明集講話」及び社友の作品を掲載す
別に漢詩漢文の添削代作等の規定あり切手五錢送付せらるれば規則掲載の「漢詩」一部贈呈す

土屋風洲先生著
晚晴樓文鈔
定價八十五錢
郵税八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり説あり辨あり序あり記あり碑あり傳あり書あり贊銘あり題跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし苟も漢文を學ばむと欲するものこれを模範とせば又良師なきを憂ふるを須ゐざるなり殊に明治時代の碩學文豪辭を極めて各篇に讚評を加ふ卒然巻を開けば天下の文星一堂に會して道を談じ文を論ずるの偉觀を成す綠陰深處にこれを繙かば涼風自ら起つて神氣清爽を覺えむ

二五

エト2720

噴火口

村上專精先生序
高島米峯先生著
定價八十錢
郵税八錢

著者心内に鬱積する熱火今や轟然として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を慘狀と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその舊著『廣長舌』『惡戰』等に比し來つて本書の愚論惡文更に一段の進境あるを確信するのみ

人道講話

文學博士村上專精先生主筆
月刊
一冊 七錢五厘
一年分八十二錢

『人道講話』は村上先生の人道講話を連載するもの也
『人道講話』は教育宗教道德の三面を有す
『人道講話』は精神の涵養を以て教育の本領とす
『人道講話』は人道の實踐を以て宗教の要務とす
『人道講話』は父母の孝養を以て道德の大本とす

藝文

月刊
一冊 廿二錢
半年分 四十二錢
一年分 八十二錢

『藝文』は京都帝國大學教授及び其他學者の研究創作を發表する機關雜誌也
『藝文』は東西兩洋の學術文藝に對し最謹嚴深刻の批判を下さむとする者也
『藝文』は關西思想界の中心として兼て關東の思想界を風靡せむとする者也

終

